紹介

『シリーズ日本人と宗教』の目的と展望

林 淳

一 近世から近代へ

島蘭進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教——近世から近代へ』（全六巻、春秋社、二〇一四—一五年）は、近世の宗教史に関する研究を問い直し、近代の宗教史の研究へと接続させて、これまで見えにくかった、近世から近代への宗教史の展開を捉えようとする試みである。宗教史における「近世から近代へ」の持続と変化を対象とし、「日本人と宗教」の理解を更新し、深化させることが意図されている。またそれは、歴史学と宗教学、思想史と宗教史などの異なる分野の敷衍をまたぎ、交流する機会を拡充しようとする企てだともいえよう。歴史学、宗教学、思想史、民俗学などの研究者が執筆者として参加しており、宗教史の重層性を叙述することをこの研究、これまでの研究の到達点をしめすとともに、これからの研

究の方向を見通すことも目的としている。

日本宗教史にとって花形は、古代・中世にあった時期が長くあつたし、その傾向は今もさほど変わっていない。古代史であれば、祭祀遺跡、伊勢神宮の成立、飛鳥時代の仏像や建築、記紀神話、平安時代の最澄や空海、浄土教の流行など、宗教にかかわる話題は事欠かない。中世になっても、親鸞の真宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗、中国からの来た禅宗、一向一揆など、宗教が社会的な勢力をもつて影響力を行使したことは、日本史の教科書には記されている。古代、中世には大寺院や神社が、政治的な影響力を行使し、経済や商業にも関わっていたことは広く知られている。

ところが近世になると、キリスト教の伝来と流行、江戸幕府によるキリシタン禁制、寺請制度の確立が言及されることはあるが、それ以上のことは知られてはいない。教科書の記述にも宗教にかかわる内容は激減している。近代になると、王政復古、神仏分離令、廃仏毀釈と、内村鑑三不敬事件くらいが教科書に載るところであろうか。

近世という時代では、強力な世俗的権力のもとで宗教は世俗化し、人々は宗教に依存しなくても世俗的な倫理の教えに従い、人間関係に支えられて生涯を生きとおすことができるようになったと理解できそうである。近世がそうであるならば、資本主義と科学技術にもとづく近代には、ますます宗教を必要とせず、世俗化の風潮は強まったと結論づけられることが多い。

古代・中世という遠い時代の方が、「日本人と宗教」の風景は、くつきりとイメージできるし、読者の関心を引きつけることもできるが、近世・近代となると、その風景は見えにくくなるようである。身近な時代であるにもかかわらず（それゆえに）、意識して理解する意欲を持ちにくいともいえよう。ここに「日本人と宗教」の逆説があるような気がする。これまでも近世・近代の宗教史は、少数の研究者によって進められてきたが、しかし大方は長く放置され、少なくとも歴史学の分野では研究が少なかった事実は否めない。こうした研究状況が変わったのは、近年のことなのである。

二 シリーズの構成

このシリーズが構想されるにあたっては、一九九〇年以降の近世宗教史研究の活性化という状況がまずあり、その実証的な成果を踏まえて近代を展望することが目ざされている。近代といっても、主に一九世紀までで区切っている。近世社会における将軍と天皇、神・儒・仏の諸思想、生と死、メディアと出版、参詣と勸進などが狙上にあげられているが、宗教史のみならず思想史、文化史、社会史、民俗史との関連が重視されていることが、このシリーズの特徴である。各巻の内容を一瞥しておきたい。

『第一巻 将軍と天皇』では、幕府の統制を受ける下で、朝廷が果たした幾つかの役割を示し、その中で最重要と言える天

皇・公家・門跡が果たした宗教的役割について、さまざまな角度から検討している。将軍と天皇がかかわりあった近世から、天皇のみが権力の中枢にいる近代へと大きく変化したが、近代の天皇制のもとにある宗教にも光をあてている。

『第二巻 神・儒・仏の時代』では、近世から明治期にかけての諸宗教の配置を展望しつつ、その変容について考察がなされる。キリスト教への対抗とともに神・儒・仏の並立という意識が広まり、三者相互の葛藤や棲み分けが成り立つ。神・儒・仏の並立は、国家神道を中心とする近代の宗教史にも影響を与えていくことが示唆される。

『第三巻 生と死』では、檀家制度にもとづき人々が仏教式で葬られ供養されるようになり、日本人の死生観は根本的な変化をとげた点をふまえて、死者の行方、来世のありかた、殉死や心中、人神信仰などが説明されている。身近な神々（霊神、生き神）への信仰や祭祀が発展し、近代的な死生観の基盤をつくったことが論じられている。

『第四巻 勸進・参詣・祝祭』では、近年に発展した勸進の宗教者の研究をもとに、寺社参詣、霊場、富くじ、開帳、教派神道などが扱われている。本山・本所・頭による勸進の宗教者の支配は、明治維新で崩れながらも教派神道による宗教者・芸能者の包括に引き継がれたことも議論されている。

『第五巻 書物・メディアと社会』では、書物・メディアが社会をどう変え、また宗教をどう変えてきたのかを問い直し、中

世から近代までを見通しながら、書物・メディアの歴史を展望する。近世は「文字社会」であると言われるが、近世・近代の識字についても考察をしている。

『第六巻 他者と境界』では、国家権力が作りあげた制度にあわせて宗教史を理解していくことで、取りこぼしていくテーマや見えなくなる事実や葛藤を拾い上げていこうとしている。邪教、迷信、女人禁制、差別、蝦夷、琉球などが扱われているが、マージナルな位置を意識化することで全体像が見えてくることをこころがけている。

以上、駆け足で各巻を紹介してきたが、収録論文については、手に取ってじっくり読んでいただきたい。このシリーズの企画が生まれた研究史的な背景について一言しておこう。

三 近世宗教史の研究の進展

近世の国制において宗教がもつ機能を指摘し、朝幕関係論という新たな領域を生み出し、研究の質を底上げさせるきっかけを作ったのが、高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』（一九八九年）であったことは異論のないところであろう。近世宗教史の研究は、高埜の提言を受けとめ、そこで展開されている論点を継承し、深化させる方向で進んだ。一九八〇年代以降、近世の国家権力を朝廷を含んだ形で理解する方向が打ち出されて、近世の国家権力と宗教の関係は、国家や地域社会のありかたを問い直す論点を提供するテーマとして認識されるようになった。

僧侶を含め、宗教や宗教者の統制は、多く朝廷が保持する権限に依存してなされていたからである。

江戸幕府は、寺院、神社、修験、神職、陰陽師などを直接に掌握し、支配しようとはしなかった。寺院、修験は、各宗派の本山に支配をまかせ、神主、陰陽師は、吉田家、土御門家などの本所となる公家の家職にまかせて、媒介的に寺院、神社、さまざまな宗教者に関わることにした。そうすることによって、幕府は内部の機構のなかに僧侶、神職などを立入らせることはなく、権力機構の内部の世俗化に成功したといえよう。その分、寺院、神社、宗教者の世界に幕府が直接に介入することはなく、寺院、神社、宗教者の既得権益を保護することになった。そして寺院、神社、宗教者の統制は、さきに述べたとおり朝廷のもつ権限に属すようになった。

朝廷を含んだ形の近世国家権力論の立場に立つと、朝廷の儀式、公家の役儀、門跡寺院、修験、神職、陰陽師などは、国家の統制体系のなかで位置づけられるものと理解されるようになった。修験、神職、陰陽師、神子、神事舞太夫などの宗教者の研究が盛んになったが、その場合、宗教者を統制する本山、本所、頭による支配の方式、あるいは組織化の解明がなされるようになった。それは、かつて民俗学者が研究してきた民間信仰の領域に重なるが、民俗学者は、組織に組みこまれた宗教者の日常態にはあまり興味をもたなかった。宗教者は単独で遊行し放浪するというイメージは、民俗学の世界には好んで語られて

きた。「ヒジリ」「まれびと」「異人」「遊行」という概念は、民俗学のそうしたイメージの増幅に寄与してきたことは事実であろう。一九九〇年代以降の宗教者の研究は、民俗学の成果を批判的に学びながら、支配の方式や組織化から宗教者の日常態を捉えて、多くの成果を生み出した。

四 近代の宗教史への展望

近代の宗教史は、村上重良、安丸良夫によつて研究されてきたが、国家神道と民衆宗教・新宗教が中心的に捉えられてきた。近年では、こうした先駆的研究をふまえて、慰霊・追悼の研究、近代仏教、植民地と宗教、宗教概念などが話題になり、研究も重ねられている。高埜にはじまる近世宗教史研究の活性化の流れと、近代の多彩な宗教史研究をどのように接合し、交流を促したらよいのであろうか。明治政府は、矢つぎ早に神仏判然令、上知令、宗教者の身分の廃止、肉食妻帯勝手たるべきの令、修験道廃止を命じて、江戸幕府が作り出した宗教者の身分を全廃し、寺社領を取りあげた。神職の統制を委託されていた吉田家、白川家は、その権限を剥奪されて、神職は神祇官のもとに属することになった。神職家の世襲が禁じられて、政府から任命された人物が神職になっていった。明治初めの政府がおこなった身分制を含めた旧制度の廃止は過激であった。近世には寺院、神社、宗教者は朝廷の権限に属していたが、旧来の朝廷の機構も本山・本所・頭の制度も廃止になるなか、激変の時代を

迎えた。

つぎに近代において教派神道がもつた役割を考えてみたい。教派神道には、金光教、天理教のように同一の信仰・実践を分かちあう信徒組織もあったが、多様で雑多なタイプの宗教者が雑居する組織もあった。近世以来の宗教者が生き残りのために求めたのは、そうした雑居の教派神道であった。第四巻に取められた小松和彦の論文によると、神仏判然令などによつて引き起こされた混乱を落ち着かせ、近代の宗教者を再組織化するための「受け皿」として教派神道が機能した。小松は、神道修成派に加入した戸隠山の旧衆徒と、同じく神道修成派に入った土佐の宗教者・いざなぎ流の太夫をとりあげている。戸隠山旧衆徒の場合、明治維新後僧侶から神官になったが、すぐに帰農が命令されて、各地の戸隠講を回ることもできなくなった。旧衆徒は、経済的基盤を回復するため神道修成派に入ること、各地を巡業できるようになった。いざなぎ流の太夫の場合、林業、農業などの生業は持っているので、経済的収入は必要ではなかったが、神道修成派の許状を得て、伝統的な信仰知識は守り続けた。もし神道修成派に属さなければ、旧衆徒の活動は復活することはなく、いざなぎ流太夫は伝来の儀礼を喪失した可能性はある。その意味で近世に活動していた宗教者は、教派神道の傘の下に入ることで、活動を存続させることができた。本山・本所・頭に統率された宗教者の歴史は、教派神道にまで視野を拡充することで長いスパンで理解することができるようになる。

江戸幕府にとっては、衣裳や行儀において違いがあるものの類似した宗教者に見えたであろう神職、修験、陰陽師は、近代になれば、神職は国家の制度に属し、修験は真言宗・天台宗の僧侶となり、陰陽師は廃業になるか、運が良いと教派神道の傘下で生活の糧を得た。明治政府がおこなった社会構造の再編成のなかで、神職、修験、陰陽師が異なる場に配置され、近代社会の内部で生きることになった。宗教者にとっての「近世から近代へ」は、持続か変容かという問題もあるが、それよりも社会構造の再編成による配置換えの問題として把握できるものと思われる。

五 人文科学の出番

このシリーズの第一巻の「序文」に書かれている文章を引用し、拙文の最後としたい。人文科学にかかわる多くの研究者へのエールが、ここには込められていると思うからである。

今こそ学問とりわけ人文科学の出番である。個人が生きるための内面的・精神的問題の解決に人文科学が答える時が来た。アカデミズムの内側に閉じこもるのではなく、苦悩する社会の要請に答え、発信することが望まれている。

本シリーズ「日本人と宗教」は、日本人にとって宗教とは何か、という根源的な問いに、歴史学・宗教学・思想史・民俗学などの学問から答えようとするものである。とくに古代・中世の日本の宗教の特徴が、近世になって見え

にくくなり、さらに明治維新後の近代における政府の政策の強い影響を受けて変容されたことに焦点を当て、近世から近代へとという時代を限定することで、見えにくかった「日本人と宗教」の解明に向かうものである。

(愛知学院大学教授)